

外部評価委員による  
新潟薬科大学応用生命科学部  
自己点検・評価結果

【平成20年度(平成20年4月1日～平成21年3月31日)】

新潟薬科大学  
応用生命科学部

## はじめに

平成20年度の教育研究活動に関する外部評価の結果をお届けします。

応用生命科学部において昨年度初めて実施した外部評価に引き続き、本年度は2回目の外部評価を実施しました。教員各自および各種委員会が平成20年度の教育研究活動についてまとめた「自己点検・評価表 平成20年度」をはじめとする諸資料に基づいて昨年度と同じ3名の外部評価委員に評価をお願いしました。

寺田 弘先生	東京理科大学薬学部薬効物理化学教室教授 東京理科大学総合研究機構 DDS 研究センター長
濱口 哲先生	新潟大学理学部自然環境科学科・自然科学研究科環境共生科学専攻教授
服部良男先生	新潟薬科大学応用生命科学部客員教授

外部評価委員の先生方には平成20年度の教員個人の教育・研究・社会活動評価、委員会・各種施設・産官学連携推進センターの活動・運営についての評価およびこれらの活動に関する総合的な講評をお願いしました。外部評価の依頼に当たって、前回の外部評価でご指摘いただいた事項を参考にして評価用の資料の改善を図りました。たとえば、自己点検・評価委員会による総括的な点検・評価の実施、授業・委員会負担・業績の一覧表作成などです。さらに平成21年12月16日(水)には外部評価委員各位に本学までお越しいただいて、施設設備の現地視察と外部評価会議を行い、教職員に対して総評を賜りました。

ここにとりまとめた内容および「自己点検・評価表 平成20年度」に記載されているいろいろな提言を総合的に受け止めて、学部で共有する作業をすすめることにより具体的に教育、研究、社会活動に反映させ、学生、学生の保護者、地域、産業界の期待に応える応用生命科学部を築きあげることが外部評価を生かすために重要です。

授業評価に参加してもらった学生諸君、評価表作成・外部評価会議に協力いただいた教員各位、お世話をいただいた事務職員の皆様、そしてなによりも情熱をもって評価していただきました外部評価委員の先生方に厚く御礼申し上げます。

平成22年1月8日  
新潟薬科大学応用生命科学部  
自己点検・評価委員会  
委員長 平岡 昇

## 目 次

I	外部評価会議の日程と外部評価用資料	1
II	外部評価会議のまとめ	14
III	平成20年度の教育研究活動に関する講評	16
IV	委員会、センター、施設に対する評価	24

## I 外部評価会議の日程と外部評価用資料

### 1 外部評価者

寺田 弘（東京理科大学教授）、濱口 哲（新潟大学教授）、服部 良男（本学客員教授）

### 2 評価日程

実施日	平成21年12月16日（水）
外部評価委員到着→学長室へ	14時前
大学施設見学（薬学部講義研究棟、カフェテリア）	14:00～14:30
各種委員会委員長等との質疑応答（会議室）	14:45～16:15
教職員との懇談（B302教室）	16:30～17:00

※助手以上+事務部課長以上

### 3 被評価者（○ 委員長）

	委員会名	平成20年度委員	平成21年度委員
	学長	山崎 幹夫	山崎 幹夫
	学部長	平岡 昇	平岡 昇
学部の委員会	予算	○ 平岡 昇	○ 平岡 昇
	将来計画	○ 平岡 昇	○ 平岡 昇
	自己点検・評価	○ 平岡 昇	○ 平岡 昇
	F D	○ 武内 征司	○ 佐藤 眞治
	教務	○ 波田野義比古	○ 波田野義比古
	学生	○ 太田 達夫	○ 太田 達夫
	入試	○ 武内 征司	○ 武内 征司
	就職	○ 浦上 弘	○ 浦上 弘
	図書	○ 三宅 紀子	○ 三宅 紀子
	国際交流	梨本 正之	○ 梨本 正之
	共通機器・施設	○ 石黒 正路	○ 石黒 正路
	倫理審査	○ 浦上 弘	○ 浦上 弘
	病原体等安全管理	○ 太田 達夫	○ 太田 達夫
	防災	○ 川田 邦明	○ 川田 邦明
全学委員会	広報	武内 征司	武内 征司
	ホームページ	中村 豊	中村 豊
	I T	○ 米田 照代	○ 米田 照代
	安全衛生	梨本 正之	○ 梨本 正之
	サイバーキャンパス推進	米田 照代	米田 照代
	ハラスメント防止	平岡 昇	平岡 昇
センター	産官学連携推進センター運営	○ 小西 徹也	○ 小西 徹也
施設管理	図書館運営	○ 武内 征司	○ 武内 征司
	放射線安全管理	梨本 正之	梨本 正之
	放射性同位元素利用施設運営	梨本 正之	梨本 正之

	動物実験	佐藤 眞治	佐藤 眞治
	組換えDNA実験安全	○ 高久 洋暁	○ 高久 洋暁
大学院	研究科入試	○ 石黒 正路	○ 重松 亨
	研究科教務	○ 梨本 正之	○ 三宅 紀子
	博士後期課程設置	○ 浦上 弘	

自己点検・評価委員

○平岡 昇、武内 征司、浦上 弘、佐藤 眞治

薬学部長、薬学部自己点検・評価委員長

○北川 幸己

事務職員

鈴木 正利（事務部長代理、(兼)学生課長）

生野 昭雄（教務課長、(兼)入試・広報課長）

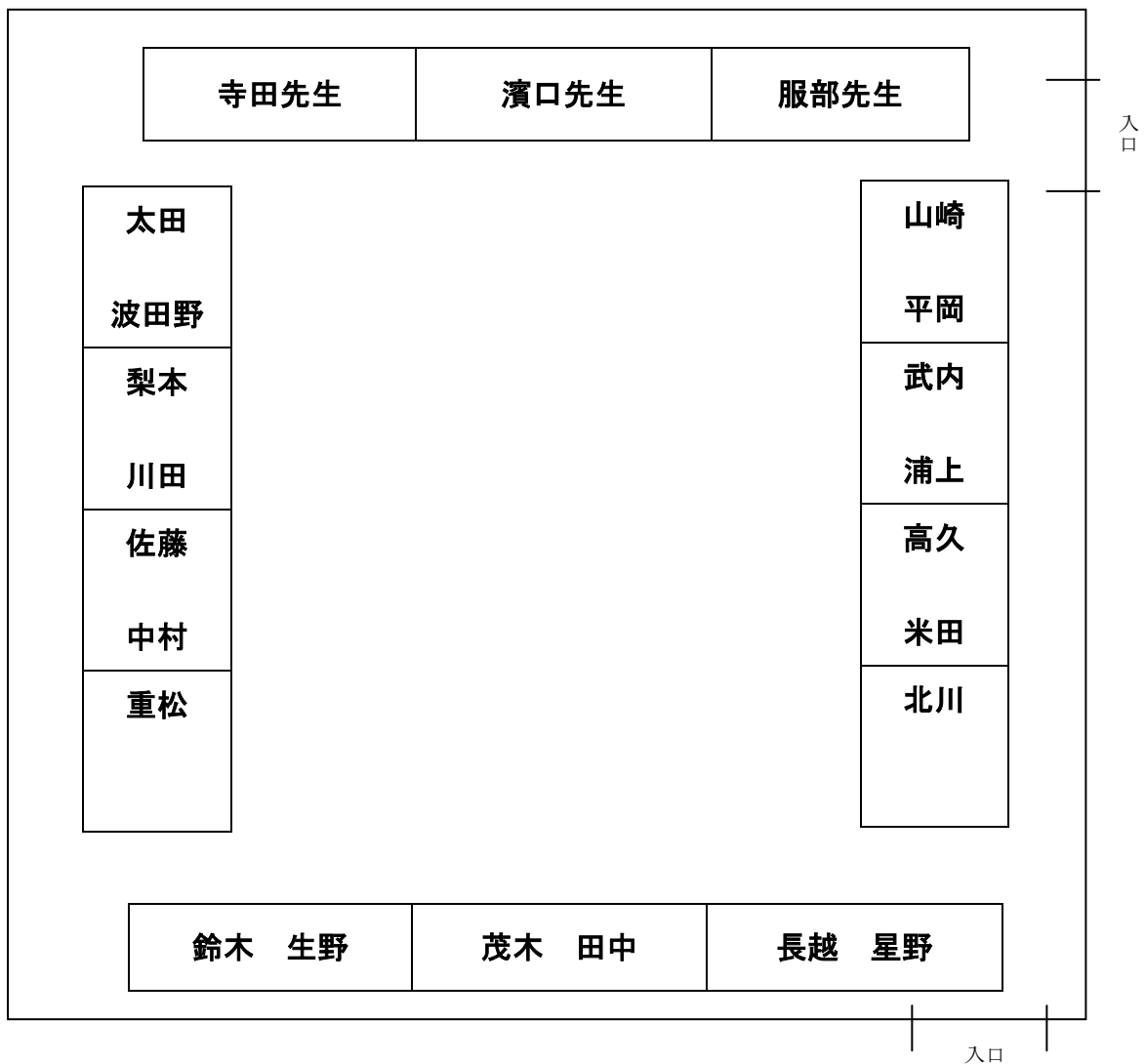
茂木 弘邦（庶務課長）

田中 竜太（学生課長補佐）

長越 暁子（教務課教務係長）

星野 要子（庶務課庶務係長）

### 外部評価会議座席配置図



## 資料一覧（平成20年度外部評価用）

### < 1. 自己点検・評価関係 >

- ①自己点検・評価表（平成20年度）
- ②平成20年度応用生命科学部生による授業評価結果（前期・後期）
- ③委員会関係の各種資料
  - ・ 自己点検・評価委員会（4～13頁）
  - ・ 将来計画委員会
  - ・ 産官学連携推進センター
  - ・ 医専学部化第二次検討委員会（医専学部化第二次検討委員会からの答申）

### < 2. 学生募集要項（平成22年度版） >

- ①平成22年度学生募集要項（応用生命科学部、薬学部）
- ②平成22年度学生募集要項（応用生命科学研究科）
- ③平成22年度学生募集要項（薬学研究科博士後期課程）

### < 3. 大学案内、パンフレット等 >

- ①大学案内 2010
- ②応用生命科学部受験生への熱いメッセージ
- ③応用生命科学部教員プロフィール集

### < 4. 履修関係資料（評価対象年度である平成20年度版） >

- ①平成20年度学生便覧・平成21年度学生便覧
- ②2008講義要項（応用生命科学部、応用生命科学研究科）
- ③2008講義要項（薬学部、薬学研究科）
- ④平成20年度オリエンテーション資料（応用生命科学部）
- ⑤平成20年度オリエンテーション資料（薬学部）

### < 5. 学校法人関係書類 >

- ①学校法人の平成20年度決算書、予算組織別決算説明書、事業報告書
- ②園内報 No. 99（平成21年7月発行）

### < 6. その他 >

- ①新潟薬大ニュース VOL. 25（平成20年12月1日発行）

## 平成20年度 総括的な自己点検・評価

平成21年8月24日

応用生命科学部自己点検・評価委員会

平成19年度外部評価で提案された総括的な自己点検・評価を試みた。平成20年度自己点検・評価表などの資料に基づくとともにそれらの資料には現れない事項もいくつか取り上げて自己点検・評価委員会で学部全体の自己点検・評価を行った。

### 1 使命、目的、教育目標

使命、目的に関しては変更はない。平成21年度の博士後期課程の設置に合わせて応用生命科学研究科の目的を大学院学則に盛り込んだ。学部並びに研究科の教育目標をより具体的に示すように改正して学生便覧に掲示した。

### 2 管理運営と財務

#### (1) 理事会と評議員会

学校法人新潟科学技術学園の理事会と評議員会の平成20年度活動概要は資料(園内報 No.99、別表1および別表2)に記載されているとおりである。平成19年9月以降理事長代行が続いていたが、平成21年1月23日の理事会において吉川恵次・新潟医療技術専門学校長が理事長に選任された。3月には任期満了に伴って次期の評議員理事と学識経験者理事が選任され、新しい体制の理事会で新年度を迎えることになった。

大学との関係では、平成20年9月26日付けの医専学部化第二次検討委員会の報告書(別添資料)にあるように、新潟医療技術専門学校の新潟薬科大学の4年制学部化への検討が進行する見通しである。

#### (2) 大学運営

学部の運営は教授、准教授、助教で構成する教授会、大学全体の運営は部局長会、研究科の運営は研究科委員会、大学院全体の運営は大学院委員会という管理運営体制が確立されてきた。それに伴い、各会の取扱事項の整理が行われ、それぞれが機能するようになった。

#### (3) 財務

昨年度に続いて定員以上の入学者を確保できた。しかし、応用生命科学部開設以来唯一定員割れしていた学年が3年生に在籍しており、引き続き平成20年度は厳しい財政運営を余儀なくされた。決算では3千万円弱の黒字にとどまった。教員のうち、教授1名が定年退職、助教1名が退職、寄付講座の助手1名が退職した。寄付講座の助手は平成21年度に採用することとしたが、他の2名の後任人事は凍結されている。なお、寄付講座の寄付団体の一つが経済産業省から取引停止命令を受けたことから大学の公共性に鑑みて平成21年度からの寄付を辞退することとした。この措置に伴う寄付講座の維持に関する善後策を平成21年度に講じることとし、寄付講座は平成21年度も存続の見通しである。

### 3 入学者の受け入れと広報活動

平成20年度から学長を委員長とする全学委員会である広報委員会が組織された。広報においてますますその重要性が増しているホームページを一新し、内容を充実させた。全国平均でも受験生の7割が参加するといわれるオープンキャンパスの開催、各種広報媒体の利用、進学ガイダンスへの参加、高校訪問、高大連携事業の強化などを事務部広報課と密接に協力して推進した。入学試験の種類は変更しなかったが、県内外の指定校枠を広げた。また、応用生命科学部入試委員会独自の広報活動も活発に行った。特に本学部卒業生と在学生の生の声を集めたパンフレット（別添資料）は高校生並びに高校教員に大きなインパクトを与えた。入試の結果を園内報 No.99の別表5に示した。志願者数は前年度とほぼ同じであり、入学定員120名に対して146名の入学者を迎えた。受験生に占める県内高校卒業生の比率が徐々に高くなっている現状も踏まえて入学者確保の策を立案、実施する。

### 4 教育と学生生活

#### (1) 早期（3年修了時）卒業制度

学則にうたわれている早期卒業制度に関する細則を決めた。この制度による卒業の申請が実際にあり、第1号の早期卒業生が誕生し、本学大学院に進学した。今後とも優秀な学生に対する励みになるものと思われる。

#### (2) 転学部の実施

前年度に細則が定められた転学部制度による転学希望者があり、薬学部の学生4名が受験して平成21年度から応用生命科学部で学ぶこととなった。平成20年度には、応用生命科学部から薬学部への転学に関する細則もできたので、今後は逆の転学部も可能である。学生の進路変更に応えるこの制度が動き始めたことは、複数学部を擁する大学の長所の一つが活かされたものと考えている。

#### (3) 教育の内容

カリキュラム改訂の必要性が教員の間で共通認識となっているが、新入生に対する初年次教育の実施は喫緊の課題となっており、学部として加入している初年次教育学会での議論などを参考にして平成21年度にできるところから順次実施することを決定した。徐々に内容を充実させて、新入生の大学教育・生活への順応を促し、脱落者を減らすことに寄与できる科目とする。

#### (4) 教育負担

「自己点検・評価表」の資料として「平成20年度授業負担一覧表」を作成した。教員の間で授業負担にある程度の差があることは避けられないが、1週間の授業時間数が6時間未満であるために私学助成の私立大学等経常費補助金の対象とならない教員が数名いることは再考の余地がある。ただし、勤務の形態によりやむを得ない場合もある。

研究室毎の卒業研究生、大学院生の受け入れ数など他の要因についても考慮する必要があるか否かを来年度協議する。



## (5) 教育環境

文部科学省採択事業「サイバーキャンパス整備事業」(H19-H20年度) 予算の活用によるIT環境の整備が進んだ。情報実習室のPCの入れ替えと増設、研究室PCの新規購入などハード面の他に、違法コピー排除のためのマイクロソフト社およびケンブリッジソフト社とのソフト総括契約、すべてのPCとUSBメモリーのウイルスチェック、「情報セキュリティポリシー」と「情報ネットワーク利用ポリシー」の制定などソフト面での充実が進んだ。来年度は利用と管理の方法に関してより合理的で効率的な方法を確立する。

## (6) 学生生活

定例の学生関係の行事等は順調に実施されたが、恒例となっていたスキースクールは参加希望者が少なく中止となった。他人と交流できる学生を育てる手だてを考えなければならない状況である。交通事故や行方不明事例(11~3月)の発生など学生をめぐるトラブルが数例発生した。今後も継続して交通安全指導などに取り組む。

アスペルガー障害学生1名が前期末で退学したが、学生委員会と学生課職員の支援に支えられた1年半の本学での学生生活は本人の成長の一助となり、今後の進路に対して明るい見通しをつけることができたことは幸いであった。障害を持つ学生に対する支援に関するこの経験は今後に生かすことができる。

## (7) 就職と進学

平成20年度の就職戦線は、年度後半の急速な経済情勢の悪化を反映して熾烈なものであったが、最終的には95%の内定率を確保した。大学院進学希望者29名(4年生104名の28%)は全員進学を果たした。過去3年間の卒業生の動向を園内報No.99の別表4に示した。進路決定状況は応用生命科学部の学生募集にとって非常に重要な要素であるので、次年度以降のキャリア教育のさらなる充実を図る。

## (8) 大学院の教育と学生生活

平成19年度の大学院応用生命科学研究科修士課程完成年度に続き博士後期課程の設置を計画したが、薬学部の新入生の定員超過によりその設置が実現できなかった。博士課程設置委員会はさらに1年間活動して、1年遅れの平成21年度に博士後期課程の設置にこぎつけた。この設置の遅延のために薬学研究科博士後期課程に進学していた大学院生の1名から応用生命科学研究科への転科希望があり、規程の整備を経た後、転科が実現した。

3月には、博士後期課程の最初の入学試験を実施した。定員3名に対して、6名が入学した。2名は本学部卒・本研究科修了、1名は本学部卒・新潟大学大学院医歯学総合研究科修了・本大学院薬学研究科1年在籍、1名は本学薬学部卒・東北大学大学院博士前期課程修了、1名は社会人、1名は外国籍といういろいろな経歴の大学院生を迎えることができた。

博士後期課程についても講義科目を充実させ、資料の講義要項に記載の通り特殊講義としてシラバスを作成し、研究室でマンツーマンに近いかたちで実施することとした。

外国人留学生から学費免除の申請が出されたが、規程の未整備のため、当面の申し合わせとして入学金（20万円。本学卒業生は免除）と前期授業料（20万円）は納めてもらい、後期以降は再検討することとした。日本人と外国人との間の経済格差、公平性などに配慮した制度を来年度中に整える。

## 5 研究

退職者を除く教授11名、准教授9名、助教・助手8名の計28名について、「自己点検・評価表」の資料に研究業績数を一覧表としてまとめた。合計した数は、発表論文延べ50報、学会発表延べ176回、著書4編、科学研究費の獲得9件であった。1人当たりの発表論文数の平均は教授2.3、准教授1.8、助教・助手1.1報であった。業績にはかなりの個人差が認められるので、少ない教員の奮起が求められる。

平成20年度教育研究情報利用支援を受けて外国雑誌類の電子ジャーナル化がほぼ完了した。利用者数は学内外ともに増加した。学外利用者では、大学や民間企業の研究者が大部分を占め、専門分野の情報提供面で寄与していることが伺える。

## 6 社会貢献

奨学研究費、受託研究費については、自己点検・評価表に記載されたものを資料の一覧表にまとめたので、集計期間が異なる園内報No.99の別表8との間で不整合も散見されるが、企業等との共同の研究が盛んなことを反映して小規模の学部の割には多くの外部資金を獲得しているといえよう。

平成19年度に大学に設置された産官学連携推進センター（センター長：小西徹也教授）の活動がこのような社会貢献に大きく寄与し始めている。平成20年度には2件のコンソーシアムの設置、5件の地域貢献プロジェクトへの参画、4件の産学連携イベントへの出展に取り組んだほか、（独）工業所有権情報・研修館の「大学知財アドバイザー派遣事業」が採択されて知財アドバイザーの派遣を受けて知財管理体制の構築活動に取り組んだ。今後の知財管理活動の基礎を築く上で貴重な活動となった。外部資金の獲得、各種の提携事業、知財管理などの活動には複雑な事務処理業務が多く、事務部の担当部署の働きが大きな力となった。

## 7 委員会活動

平成19年度の外部評価は平成20年度末に実施されたのでその年度中への反映は部分的なものに留まったが、外部評価結果は、委員会自身の自己点検・評価の結果とともに平成21年度の活動には活かされつつある。

### （1）教員の委員会負担

「自己点検・評価表」の資料に委員会等の個人別負担を一覧表にして示した。委員会委員の任期は2年（H20-H21）で半数交代を原則とし、委員長は選挙によらないで前委員長の推薦を受けて学部長が調整し、委員は新委員長の推薦によって決めている。しかし、このような方法によってもなお負担の偏りがある。ある程度の負担の偏りは致し方ないとしても次の改選期にはさらにこの点を考慮する必要がある。また、助教の委

員会活動への参加について検討して次の委員改選時にその結果を反映する。

## (2) 委員会の整理

両学部の新津キャンパス統合に伴い、学部で異なっていた委員会名称の統一、学部委員会から全学委員会への移行は徐々に進んでいる。しかし、学部におかれている委員会間の統合や全学委員会への移行については検討の余地がかなり残されており、次年度の課題である。特に安全管理や共通機器・施設に関係する委員会については早急に対処することとする。平成22年度委員改選期に当たっては、整理された委員会が発足するよう準備を進める。

「自己点検・評価表」の委員会実績報告のうち、全学関係の委員会については主に応用生命科学部の立場で関係者に執筆してもらった。全学の動きに関する記載がなかったり、不十分だったり、特記すべき事項のない施設関係に関しては報告そのものがないものもある。委員会の整理とともに全学委員会の自己点検・評価のあり方は次年度の課題である。

## 8 自己点検・評価について

自己点検・評価制度が全学的に整備され、取り組まれていることについては一定の評価を受けた。自己点検・評価体制に関する外部評価委員の講評を参考にして今後の活動および平成20年度外部評価の方法を次のように改善する。

### (1) 自己点検・評価方法の改善

自己点検・評価表の記載について教員間で微妙な差が見られた。記載項目をできるだけ増やし、記載方法を統一することは評価をよりの確なものとし、かつ公平さを保つためにも重要である。平成20年度の自己点検・評価に当たっては、毎年5月1日付けで調査して日本私立学校振興・共済事業団に提出している学校法人基礎調査のデータを教員毎に再編成した資料に基づいて教員の授業担当コマ数を記入することとした。また、項目ごとの記入事例を具体的に示すことにより記載事項の差が少なくなるようにした。しかし、記載項目の選定については引き続き来年度の検討課題である。

服部良男委員が作成された教員負担一覧表を参考にして、授業負担一覧表を学校法人基礎調査の方式で作成した。それに基づく1週間の授業時間数、研究科委員会等への参画状況、委員会委員等の負担、研究業績をまとめて一覧表にして評価資料の一つとした。濱口哲委員から提案された「自己点検・評価表」のデータに基づいた、学部としての総合的な自己評価・点検を今回このような形式で行ってみた。

### (2) 授業評価

学生による授業評価と教員のコメントは、各教員の授業改善に役立っている。この方式の評価はもう少し継続して実施した後に行いたい。

教員同士での授業改善の取り組みと大学院教育の組織的な取り組みに関する教員間の議論と意思統一はさらに進める必要がある。

### (3) 外部評価結果の活用

前回実施した外部評価については、外部評価委員による総評、コメント、委員会評価、個人評価および実施方法を小冊子にまとめ、先に作成した「自己点検・評価表」とともに外部評価委員（3部）、法人本部（1）、学長（1）、薬学部長（1）、応用生命科学部助手以上の教員（30）に配布した。また、以後の評価関係資料として残部を保存している。

評価結果を教員および委員会それぞれが評価を受け入れて自己研鑽、改善に利用することとしたい。

## 9 将来計画

将来計画委員会でこれまでの評価、提言、忠告、討論などをもとにして本学部の分析を行い、それに基づいて別紙の「将来計画（案）」を作成し、討論に付した。現状認識と当面の課題については共通認識となりつつあると思われるが、学部の教育研究の方向性の共有に至っていないこと、将来計画（案）が教授会での議論として不十分であることなどの問題点がある。次年度には、これらを解決する方策をまとめ、人事を含めて実施に移す。

平成20年度の授業担当時間・委員会等負担・研究業績一覧表

【 応用生命科学部】

	市川	梨本	石黒	平岡	及川	武内	波田野	太田	小西	浦上	鎌坂	平山	高久	米田	川田	中村	佐藤	三宅	重松	新井	高橋歩	伊藤	田宮	相井	西田	永塚	上野	小長谷	宮崎	小島	中野
職位	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	教授	准教授	准教授	准教授	准教授	准教授	准教授	准教授	准教授	准教授	助教	助教	助教	助教	助教	助教	助教	助教	助手	助手
1週間の授業時間数	7	5	4	6	6	7	11	8	5	6	7	2	6	4	6	9	4	7	4	9	14	3	3	6	3	3	5	3	6	4	0
部局長会				○		○	○	○	○	○																					
教授会	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
大学院会		○	○	○																											
研究科委員会	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					○						
<b>学部委員会</b>																															
予算委員会				◎			○																								
将来計画委員会				◎		○	○			○	○																				
自己点検・評価委員会				◎		○				○							○														
FD委員会(大学院兼任)		○				◎				○							○					○									
教務委員会		○					◎								○					○	○										
学生委員会								◎					○		○				○	○											
入試委員会	○					◎					○			○	○																
就職委員会					○					◎	○		○		○																
図書委員会																○		◎	○												
国際交流委員会		○			◎										○																
共通機器・施設委員会			◎							○		○		○																	
倫理審査委員会	○	○								◎		○						○													
病原体等安全管理委員会								◎		○																		○			
防災委員会	○									○					◎	○					○										
<b>全学委員会</b>																															
学長諮問委員会										○			○	○												○					
広報委員会					○					○																					
HP委員会																○															
IT委員会					○					○					◎								○								
学生部運営委員会									○	○					○				○												
安全衛生委員会		○																													
カハ-キャンパス推進委員会										○					○							○									
ハラスメント防止委員会				○				○											○												
<b>センター(全学)</b>																															
産官学連携推進センター運営委員会										◎	○		○		○																
<b>施設・管理(全学)</b>																															
図書館運営委員会						◎										○		○	○												
体育施設管理運営委員会								○							○																
RI施設運営委員会		○											○								○					○					
放射線安全管理委員会		○																				○									
放射性同位元素利用施設運営委員会		○											○									○				○					
動物実験委員会	○																○	○													
組換えDNA実験安全委員会	○												○																		
<b>研究科委員会</b>																															
入試委員会			◎											○						○											
教務委員会		◎											○					○													
博士後期課程設置委員会						○				◎					○																
◎ 委員長		1	2	3	1	3	1	2	1	3				1	1			1													
○ 委員	5	8		1	1	5	2	4		10	5	2	8	4	8	6	6	6	5	6	3				3			1			
<b>学校法人</b>																															
理事				○																											
評議員				○						○	○																				
<b>研究業績</b>																															
発表論文	1	8	6			1	1		6	1	1		5		3	1	3		4			1	2		1	1			4		
学会発表	1	6	6	1		13	4		14	2	15	10	10	6	8	13	8	6	8	4		1	7	1	5	3		2	14	8	
著書									2	1													1								
特許出願																															
科研費		1	1				1						1			1	1	1						1			1				
受託研究費	1	1	1						3	3	3	1	4		2				1			1				5			1	3	
奨学研究費									3		2	1	2		5		1								1					2	
その他の研究活動						1					2				1							1									

退職

退職

退職

## 平成20年度授業負担一覧表

【応用生命科学部】

●授業時間数は、平成20年度学校法人基礎調査(日本私立学校振興・共済事業団)の算出方法に基づく、平成20年5月1日現在の担当予定時間数である。

●1週間の授業時間数が6時間以上であることが、専任教員の認定(経常費補助金の基礎となる教員数に組み入れることができる)基準の1つとなる。ただし、助教・助手の認定については、授業時間に係る基準は適用されない。

●省略標記の説明

<学年> M1・2: 博士前期課程1年・2年、その他は学部の学年

<学期> 前: 前期、後: 後期

<必選の別> 必: 必修科目(応用生命科学科のみの必修科目及び食品科学科のみの必修科目を含む)、選: 選択科目

<関係資格> 衛: 食品衛生コース科目(食品衛生監視員及び食品衛生管理者任用資格取得)、NR: NR養成講座科目、FS: フォトスペシャリスト養成課程科目

氏名 (職位)	科目名称	学年	学期	必選 の別	単位 数	関係資格	授業毎 時間数	合計 時間数 (A)	1週間の 授業時間数 (A/30)・・・(B)	年間 総時間 (B*30)
市川 (教授)	応用生命科学概論	1	前	必	2		2	186	6	180
	応用生命科学基礎実習Ⅱ	1	後	必	1		30			
	生化学Ⅰ	2	前	必	2	衛	30			
	生化学Ⅱ	2	後	必	2	衛	30			
	科学技術英語Ⅵ	3	後	必	1		28			
	動物バイオテクノロジー	3	後	必	2		30			
	生命科学実習Ⅴ	3	前	必	1		20			
	生命科学特別講義	4	前	選	2		2			
動物・細胞生物学特論	M1・2	前	選	1		14				
梨本 (教授)	応用生命科学概論	1	前	必	2		1	140	5	150
	応用生命科学基礎実習Ⅱ	1	後	必	1		20			
	生命科学実習Ⅱ	2	後	必	1		40			
	細胞生物学	3	前	必	2		30			
	科学技術英語Ⅵ	3	後	必	1		18			
	遺伝の分子生物学	3	前	必	2		30			
	生命科学特別講義	4	前	選	2		1			
石黒 (教授)	応用生命科学概論	1	前	必	2		1	112	4	120
	生物有機化学Ⅰ	2	前	必	2	衛	17			
	生物有機化学Ⅱ	2	後	必	2	衛	30			
	科学技術英語Ⅵ	3	後	必	1		14			
	ゲノム創薬	3	後	選	2		14			
	生体分子認識科学	3	後	選	2		28			
	化学工業とグリーンケミストリー	4	前	選	2		6			
	生命科学特別講義	4	前	選	2		2			
一次産業と社会・生活	1	前	必	2		13				
平岡 (教授)	応用生命科学概論	1	前	必	2		4	177	6	180
	応用生命科学基礎実習Ⅱ	1	後	必	1		30			
	植物バイオテクノロジー	2	後	必	2		30			
	科学技術英語Ⅵ	3	後	必	1		14			
	生命科学実習Ⅲ	3	前	必	1		40			
	植物環境学	3	前	選	2		30			
	生命科学特別講義	4	前	選	2		2			
	植物資源学特論	M1・2	後	選	1		14			
及川 (教授)	一次産業と社会・生活	1	前	必	2		17	167	6	180
	生活安全学	1	後	必	2		30			
	応用生命科学概論	1	前	必	2		1			
	環境科学	2	後	必	2	衛	15			
	応用生命科学基礎実習Ⅲ	2	前	必	1	衛	20			
	資源循環論	2	後	必	2		30			
	生命科学実習Ⅰ	2	後	必	1		40			
科学技術英語Ⅵ	3	後	必	1		14				
武内 (教授)	有機化学	1	後	必	2	衛	58	218	7	210
	応用生命科学概論	1	前	必	2		2			
	応用生命科学基礎実習Ⅳ	2	前	必	1	衛	80			
	有機合成化学	3	前	必	2		30			
	生命科学実習Ⅳ	3	前	必	1		40			
環境調和有機合成化学特論	M1・2	後	選	1		8				
波田野 (教授)	基礎無機化学	1	前	必	2	衛	58	327	11	330
	基礎無機化学演習	1	前	必	1		32			
	無機化学	1	後	必	2	衛	58			
	無機化学演習	1	後	必	1		60			
	応用生命科学概論	1	前	必	2		1			
	応用生命科学基礎実習Ⅰ	1	後	必	1	衛	80			
	科学技術英語Ⅵ	3	後	必	1		28			
	食品科学特別講義	4	前	選	2		2			
生物物理学・海洋生物資源学特論	M1・2	前	選	1		8				
太田 (教授)	基礎生物学	1	前	必	2		58	229	8	240
	基礎生物学演習	1	前	必	1		26			
	生物学	1	後	必	2		58			
	生物学演習	1	後	必	1		28			
	応用生命科学概論	1	前	必	2		1			
	機能形態学	2	前	選	2		30			
科学技術英語Ⅵ	3	後	必	1		28				

平成20年度授業負担一覧表

【応用生命科学部】

氏名 (職位)	科目名称	学年	学期	必選 の別	単位 数	関係資格	授業毎 時間数	合計 時間数 (A)	1週間の 授業時間数 (A/30)・・・(B)	年間 総時間 (B*30)
小西 (教授)	応用生命科学概論	1	前	必	2		1	157	5	150
	応用生命科学基礎実習Ⅲ	2	前	必	1	衛	30			
	科学技術英語Ⅵ	3	後	必	1		24			
	生体機能学	3	前	選	2		30			
	機能食品科学	3	後	必	2	衛・NR・FS	30			
	食品科学実習Ⅲ	3	前	必	1	衛	40			
食品科学特別講義	4	前	選	2		2				
浦上 (教授)	応用生命科学概論	1	前	必	2		2	168	6	180
	科学技術英語Ⅵ	3	後	必	1		28			
	分子免疫学	3	前	選	2		30			
	食品微生物学	3	前	必	2	衛・NR	15			
	食品安全学	3	後	必	2	衛・FS	30			
	食品科学実習Ⅴ	3	前	必	1	衛	40			
	食中毒疫学	3	後	選	2	衛	21			
食品科学特別講義	4	前	選	2		2				
鯉坂 (教授)	生物有機化学Ⅰ	2	前	必	2	衛	13	213	7	210
	応用生命科学基礎実習Ⅳ	2	前	必	1	衛	80			
	食品化学	2	前	必	2	衛	30			
	食品科学実習Ⅰ	2	後	必	1	衛・FS	40			
	科学技術英語Ⅵ	3	後	必	1		10			
	食品生物工学	3	前	選	2		28			
	食品科学特別講義	4	前	選	2		4			
食品生物工学・分子科学特論	M1・2	後	選	1		8				
平山 (教授)	応用生命科学概論	1	前	必	2		2	67	2	60
	食料・食品資源学	2	後	必	2	衛・FS	13			
	科学技術英語Ⅵ	3	後	必	1		28			
	食品科学特別講義	4	前	選	2	NR	10			
	機能性食品開発特論	M1・2	後	選	1		14			
高久 (准教授)	基礎数学演習	1	前	選	1		14	116	4	120
	応用生命科学概論	1	前	必	2		1			
	応用生命科学基礎実習Ⅱ	1	後	必	1		20			
	生命科学実習Ⅱ	2	後	必	1		40			
	科学技術英語Ⅵ	3	後	必	1		10			
	微生物バイオテクノロジー	3	後	必	2		30			
生命科学特別講義	4	前	選	2		1				
米田 (准教授)	ドライラボⅠ-生命科学とコンピュータ	1	前	必	2		30	188	6	180
	ドライラボⅡ-IT基礎演習	1	前	必	0.5		56			
	応用生命科学概論	1	前	必	2		1			
	ドライラボⅢ-IT中級演習	2	前	必	0.5		56			
	ドライラボⅣ-バイオインフォマティクス	2	後	必	2		17			
	科学技術英語Ⅵ	3	後	必	1		14			
構造生物学とタンパク質工学	3	後	選	2		14				
川田 (准教授)	基礎無機化学演習	1	前	必	1		28	178	6	180
	応用生命科学概論	1	前	必	2		1			
	環境科学	2	後	必	2	衛	15			
	分析化学	2	前	必	2	衛	30			
	応用生命科学基礎実習Ⅲ	2	前	必	1	衛	20			
	生命科学実習Ⅰ	2	後	必	1		40			
	科学技術英語Ⅵ	3	後	必	1		14			
	環境保全学	3	前	選	2		28			
生命科学特別講義	4	前	選	2		2				
中村 (准教授)	基礎有機化学	1	前	必	2	衛	58	272	9	270
	基礎有機化学演習	1	前	必	1		28			
	有機化学演習	1	後	必	1		28			
	応用生命科学基礎実習Ⅳ	2	前	必	1	衛	80			
	科学技術英語Ⅵ	3	後	必	1		28			
	生命科学実習Ⅳ	3	前	必	1		40			
	生命科学特別講義	4	前	選	2		2			
環境調和有機合成化学特論	M1・2	後	選	1		8				
佐藤 (准教授)	応用生命科学概論	1	前	必	2		1	120	4	120
	物理化学	2	前	必	2		15			
	応用生命科学基礎実習Ⅲ	2	前	必	1	衛	30			
	食品分析学	2	後	必	2	衛・FS	30			
	科学技術英語Ⅵ	3	後	必	1		4			
食品科学実習Ⅲ	3	前	必	1	衛	40				
三宅 (准教授)	応用生命科学概論	1	前	必	2		2	196	7	210
	応用生命科学基礎実習Ⅲ	2	前	必	1	衛	30			
	栄養科学	2	後	必	2	衛・FS	15			
	食品科学実習Ⅱ	2	後	必	1	衛	40			
	科学技術英語Ⅵ	3	後	必	1		28			
	食品加工・保蔵学	3	前	選	2	衛・NR	17			
	栄養生理学	3	後	選	2	衛	18			
	フードコーディネータ論	4	前	選	2	FS	30			
	食品科学特別講義	4	前	選	2		2			
食品栄養科学特論	M1・2	前	選	1		14				

平成20年度授業負担一覧表

【応用生命科学部】

氏名 (職位)	科目名称	学年	学期	必選 の別	単位 数	関係資格	授業毎 時間数	合計 時間数 (A)	1週間の 授業時間数 (A/30)・・・(B)	年間 総時間 (B*30)
重松 (准教授)	応用生命科学概論	1	前	必	2		2	131	4	120
	機器分析学	2	後	必	2		15			
	生物学	2	後	選	2	衛	15			
	科学技術英語VI	3	後	必	1		14			
	食品微生物学	3	前	必	2	衛・NR	13			
	食品製造学	3	前	必	2	衛	7			
	食品科学実習IV	3	前	必	1	衛	40			
	食品物理化学	3	後	選	2		15			
	化学工業とグリーンケミストリー	4	前	選	2		8			
食品科学特別講義	4	前	選	2		2				
新井 (准教授)	基礎有機化学演習	1	前	必	1		28	269	9	270
	機械の動く原理	1	後	選	2		30			
	有機化学演習	1	後	必	1		28			
	応用生命科学概論	1	前	必	2		2			
	機器分析学	2	後	必	2		15			
	分子構造解析学	2	前	必	2		30			
	応用生命科学基礎実習IV	2	前	必	1	衛	80			
	食品科学実習I	2	後	必	1	衛・FS	40			
	科学技術英語VI	3	後	必	1		10			
	食品生物学・分子科学特論	M1・2	後	選	1		6			
高橋歩 (准教授)	英語I	1	前	必	1		58	432	14	420
	英語II	1	後	必	1		58			
	コミュニケーション英語I	1	前	選	1		30			
	コミュニケーション英語II	1	後	選	1		30			
	科学技術英語II、IV(再)	1・2	後	必	各1		28			
	英語III	2	前	必	1		58			
	英語IV	2	後	必	1		30			
	科学技術英語III(再)	2	前	必	1		28			
	科学技術英語V	3	前	必	1		28			
	英語リスニングI(英語I)薬学部開講	1	前	必	1		42			
英語リスニングII(英語II)薬学部開講	1	前	必	1		42				
伊藤 (助教)	生物学演習	1	後	必	1		28	92	3	90
	応用生命科学基礎実習II	1	後	必	1		30			
	生命科学実習V	3	前	必	1		20			
	構造生物学とタンパク質工学	3	後	選	2		14			
田宮 (助教)							0	0	0	
相井 (助教)	基礎生物学演習	1	前	必	1		18	169	6	180
	応用生命科学基礎実習II	1	後	必	1		30			
	植物生理学	2	前	必	2		30			
	ドライラボIVーバイオインフォマティクス	2	後	必	2		7			
	科学技術英語VI	3	後	必	1		14			
	生命科学実習III	3	前	必	1		40			
	植物育種学	3	後	選	2		30			
西田 (助教)	基礎数学演習	1	前	選	1		14	84	3	90
	応用生命科学基礎実習III	2	前	必	1	衛	30			
	食品科学実習III	3	前	必	1	衛	40			
永塚 (助教)	基礎生物学演習	1	前	必	1		24	94	3	90
	応用生命科学基礎実習III	2	前	必	1	衛	30			
	食品科学実習II	2	後	必	1	衛	40			
上野 (助教)	応用生命科学基礎実習I	1	後	必	1	衛	80	138	5	150
	食料・食品資源学	2	後	必	2	衛・FS	4			
	科学技術英語VI	3	後	必	1		14			
	食品科学実習IV	3	前	必	1	衛	40			
小長谷 (助教)	基礎生物学演習	1	前	必	1		24	75	3	90
	食品微生物学	3	前	必	2	衛・NR	2			
	食品科学実習V	3	前	必	1	衛	40			
	食中毒疫学	3	後	選	2	衛	9			
宮崎 (助教)	基礎有機化学演習	1	前	必	1		28	184	6	180
	有機化学演習	1	後	必	1		28			
	応用生命科学基礎実習IV	2	前	必	1	衛	80			
	食品科学実習I	2	後	必	1	衛・FS	40			
	科学技術英語VI	3	後	必	1		8			
小島 (助手)	応用生命科学基礎実習IV	2	前	必	1	衛	80	120	4	120
	生命科学実習IV	3	前	必	1		40			
中野 (助手)							0	0	0	



## Ⅱ 外部評価会議のまとめ

### 財務

健全な財務体質の維持のためには学生確保が最も重要なことは論をまたない。支出の中で最も比率が大きい人件費については、人員削減のみを目的にするのではなくて、開学時に比べて教員の交代がかなり進んだ結果として研究分野も徐々に変化してきていることなどを考慮して教育課程の改革とも連動させて適切な教員数にすることが望まれる。高齢教職員の給与体系、早期退職の扱いなどの工夫でも財務の改善につながる要素になるのではないか。

### 入学者の県内比率の増加

現実をどう受け止め、教育、就職、広報などの戦略を立てるかの議論を要する問題である。地域密着型の教育・研究を謳って成功している大学の例も多い。ただし、入る時は地域出身者が多くても出るときは地域外でも通用する卒業生を送り出してほしい。

### 教育

初年次教育、リメディアル教育は、学力のレベルに合わせて一歩ずつ前向きに工夫を重ねながら取り組むしかない。理解することが大切である。実験の結果得られた数字一つにしてもそのものが持つ意味を理解できるような教育をする。

### 教育課程の改革

教育課程は教員組織と密接に関係してはいるが、その改定に当たっては教員組織（人事）とは切り離し、まず何ができる学生を育てようとするのかという人材像を明確にしてそれを実現するために必要な教育課程を構築するという考え方もある。そのためには、教員は新しい分野についても教育できるようになる努力をする覚悟も必要である。教育目標の一つに PDCA (Plan → Do → Check → Act) サイクルを自分で考えられる学生を育てることがあげられる。

### キャリア教育

4年生の1割以上が就職活動の継続などが原因でメンタルな問題を抱え、不登校となる例も少なからずみられる。入学時から将来を見つめた学習活動を行い、各自の職業観を育成する教育が必要である。

### 大学院教育

企業との共同研究を通して大学院生の就職に結びつけることを模索する。大学院生の就職指導を研究室任せにせず、大学としての就職支援活動を行う体制に関する共通認識を持つための取組が必要である。大学院に博士課程が設置されたことは重要で画期的なことである。学部から博士課程までの教育システムをしっかりと構築して、社会の厳しい評価に耐えられる卒業生・修了生を出してほしい。

## 委員会

委員会を整理して数を減らし、教員の負担軽減につなげてほしい。また、委員負担の平均化、助教、事務職員の参加も必要である。

## 研究

個人の創造性といろいろな単位の組織の力をうまくかみ合わせて研究することが望ましい。良きリーダーに導かれた複数年次にわたるプロジェクト研究を本気で考えることも必要である。研究の成果は学会発表だけでなく論文としても是非まとめてほしい。科学研究費の採択率を上げる工夫、努力を希望する。食品科学分野では応用面の研究が多い事情もあるかもしれないが、応用問題を解決するために基礎的な研究が要求されることも多い。基礎と応用のサイクルをうまく回して基礎研究面でも社会への寄与の面でも成果をあげてほしい。この種の課題についての討論の場を設けることも有益かもしれない。

## 知財管理

平成20年度から知財アドバイザーの協力を得て知財管理体制の構築に取り組んでいることを評価する。特許については、発明評価のための先行技術調査の実施、企業との協力体制は評価できるが、今後は外国への物質特許の出願を重視すること及び発明者への補償にかんする規程を明確にすることが求められる。

## 自己点検・評価活動、将来計画

毎年作成している自己点検・評価表のコメント欄には重要な課題のほとんどが網羅されている。これらの課題を共有化する過程が重要である。評価はそのためのきっかけになればよい。自己点検・評価を課題解決に役立たせることが大切である。個人業績評価はたいへん難しい。外部評価の対象としては困難ではないか。むしろ各自で目標を作り、一定期間後に採点し、反省点を改善していくという方法が適している。自己点検・評価を毎年実施し、外部評価を数年に1回実施するのが適当である。毎年の総括に基づいて大小いろいろな課題についてみんなで議論する場を作ることが大切である。将来計画委員会が平成20年度末に作成した将来計画の方向に向けて進んでほしい。

### Ⅲ 平成20年度の教育研究活動に関する講評

#### 寺田 弘 評価委員

本年度の応用生命科学部における成果として、大学院博士後期課程の設置、入学生の確保と卒業生（予定者）の高い就職率などが挙げられるかと思えます。いずれも、これまでの応用生命科学部の質の高い教育と研究成果、それに学生に対する行き届いた支援体制によるものであると思えます。

とくに、大学院博士後期課程が設置されたことは、今後の応用生命科学部のこれからの発展にとって極めて意義あることで、これまでとは異なった質の転換が求められることとなります。大学院博士前後期課程におけるカリキュラム、“飛び級”、学位授与規定に加えてあらたな研究体制の構築も考えないといけないと思えます。

応用生命科学部の研究は応用性の高い研究が行われています。研究成果を特許化する試みを一層充実させるために、それを支援する体制が弱いように見受けられます。応用性の高い研究成果は国際特許に出願しないと意味がありませんが、その費用は国内特許のそれに比して多くの費用がかかります。財政的な裏付けが必要となり、全学的な支援体制の構築が必須となります。研究活動は一般的に活発ですが、全国レベル、国際レベルで存在感を出すことができる成果を一層あげる必要があります。

学部学生に対する教育に関しては、個々にいろいろな工夫が為されていることは心強いことですが、これを全学部的なものにする必要があるのではないのでしょうか。

新潟薬科大学のあり方としては、入学生の出身校の殆どが新潟県内であることや新潟地域における社会活動が活発なことから、地域密着型を第一の選択肢として活動するのがいいかと思えます。その意味で、卒業生が新潟薬科大学で学んで本当に良かったと思わせることが、最も重要なことであると思えます。

一層のご発展を期待しております。

#### 濱口 哲 評価委員

全体として、自己点検・評価に基づく学部評価制度を立ち上げ、毎年の実施体制を構築されていること自体に敬意を表する。各教員の業績評価については、評価表からの正確な「評価」にはある程度の困難や曖昧さがあることは否定できないが、外部委員のコメントを教員の自律的な改善のためのものと位置づけ、前向きに取り組んで頂きたいと希望する。各委員会の自己評価表は、各面での活動の実体をうかがい知ることが出来、また、前年度の外部評価をも考慮に入れた活動が遂行されており、本外部評価の意義が感じられた。ただ、何より、重要なことは、個別事項の改善というより、学部全体として教育活動の実質化、研究活動や社会貢献活動の活性化のために、“組織的に”どのような方向性を持つかという点について、構成員の（方針への賛否が割れていることを相互認識することも含めた）コンセンサスだろうと思われるので、そのような観点での全体状況の記述があると、評価全体をより意味あるものにする事が出来るのではと思われる。

#### <教育面について>

入学志願者の確保から、卒業生の進路に至るまで、課題を適切に把握して、それを改善する方向での活動が行われていると評価できた。また、個々の学生の状況を踏まえた指導の努力がなされていることにも敬意を表したい。

その中で、入学生の県内比率が高いという現実に対する対応について、もう少し明確な意思が必要なのではないか。つまり、県内学生を県内で活躍する人材として育成することを中心とするのか、それを踏まえつつ県外学生の増加を図るのかは、今後、学士課程卒業者の人材育成目標を明確化して、より構造化されたカリキュラム構築を目指すすると、その辺りの明確さが重要になるように思える。

また、大学院博士課程を持つことは博士前期課程、学士課程教育への波及効果を含め重要なことではあるが、現在の日本の大学院の置かれている状況を踏まえると、人材育成目標の明確化と教育プログラムとしての整備はやはり重要である。その辺りについて、評価表にもあるように、構成員のコンセンサスを求めた議論は重要であろう。評価表の中にもあったが、現在の大学院の位置づけは、我々が大学院生として経験したものとはずいぶん大きく違ってきている。その事態に適切に対応することが求められているのだが、どの大学でもその対応は決して旨く進んでいないのが実情である。その意味では、今日、各大学はそれぞれの実情を踏まえた大学院教育を「創造する」ことが求められていると言え、その意味で構成員の共通認識、共通意思の形成は何より大切である(大学院に限ることではないが)。

#### <研究面について>

研究は主として教員個人の活動に委ねられている場合が多いものと推察される。しかし、今後、応用生命科学部の研究面での特徴付けを考える時、ある程度の継続性を意識した、複数の共同プロジェクト型の研究を意識的に構築していくような作業も必要なのではないかと思われる。

また、研究活動については極めて個人間での格差が大きいこと、また、いわゆる文部科学省の科学研究費の獲得状況が必ずしも芳しくないことについては、もう少し改善の余地がある。

基盤的な研究機器について、薬学部と共同利用化を図り、全体として整備していく努力が行われている事は重要な取り組みである。

#### <管理運営面について>

かなりの数の委員会があるが、形式的に必要なものもあるという実情は理解できるものの、もう少し合理化し統合再編する余地があるように思える。その方が、より広い立場で実質的な議論が出来ることにもなり、そのような委員会活動を通じた、教員のFD、後継者養成の意味も果たし得るように思える。また、このことは、この面での教員の仕事量の軽減という観点でも重要だと思われる。

## 服部良男評価委員

平成19年度に実施された外部評価で提案された様々な指摘、課題について、現状での取り組み、将来計画については、「将来計画委員会資料」（平成21年3月9日）、「平成20年度総括的な自己点検・評価」（平成21年8月24日）に詳細、かつ明確に整理されている。

これまで提案された指摘、課題の中には、急を要するもの、やや理想論に走るものも混在している。大学においては、十分に検討され、優先順位をつけて、将来計画に盛り込んで実施されることを期待する。既に、「将来計画委員会」の中で中期計画が検討され、平成21年度の計画が進んでいることは高く評価したい。全学で共通認識として取り組んで欲しい。

本コメントでは、出来る限り重複を避けて、追記する問題、課題について述べる。

### 1. 教育目標

平成20年度の教育目標は、基礎学力の養成、卒業研究の目的など年度別に、より具体的に示されたこと、大学院の設置に伴い研究科の目標が明確にされたことを評価したい。近年、少子化、大学の全入化により学生の質のばらつきが、高度な研究、教育を進める上で各大学で問題になっていて、基礎学力を向上させることが重要であり、1年次に於けるカリキュラム編成に活かされていることは評価される。一方、そのことが専門科目の修得、必要な教養科目や選択科目の修得にややマイナスとなっていることも否めず、根本的な解決には質の高い学生の獲得が望まれる。いずれの大学でも悩ましい問題であることは認識しているが。

### 2. 財務関係

平成19年度に引き続き厳しい財政状況となっている。平成20年度は努力の結果3千万円弱の黒字を計上しているが、その内容や将来的に考えると決して明るいとはいえない。退職教員の補充、研究機器類の購入と保全、寄付講座の存続など、今後も財政上は厳しいといえる。

#### (1) 収支

平成19年度との比較をして考察する。

収入では平成19年度に比べ微増であったが、定員割れした年度の影響もあるが、73%を占める学生納付金の減少が大きく厳しい内容となっている。授業料、寄付金の減少が大きく、受託事業、国庫補助金、私大退職金財団交付金の増加でやりくりしている。入学志願者が年々減少していることも懸念される。

支出面では、人件費は2,000万円増加した。教員人件費は減少、退職金は増加した。教員を補充していれば、人件費は大幅に増加することになるし、退職金は定常的なものではない。職員人件費の増加は問題であろう。

教育研究経費では、消耗品、委託手数料、保守管理料の増加が目立つ。管理経費では、委託手数料の増加が大きい。その他の科目では目立った増減は少ない。

#### (2) 「入るを計りて、出づるを制す」

収入を増やすためには、定員の確保、受験生の増加（広報活動の強化）、受託事業の

更なる増加、国庫補助金の最大化などが挙げられる。週時間に充たない専任教員の担当時間を増やすことは、カリキュラムの改正で急ぐべき課題である。また、寄付講座の寄付金の中止も収入面での痛手となろう。また、寄付講座の教員は私学補助金の対象になるのであろうか？

支出面での最大の課題は、教員人件費である。退職教員を補充すれば、一気に赤字となる。研究室、カリキュラムの再編で合理化を図っても、教職員のリストラ無しでは、人件費の削減ははかれない。大学でのリストラや給与の削減は企業と異なり殆ど不可能であろう。経費の削減も難しい。

参考までに、企業の人件費削減の手段を例として挙げておく。多くの企業は未だ60歳定年制を採っているが、55才以上には役職定年制、早期退職制度（残る場合は給与減額）を採用して昇給は無くなる。（銀行、商社などは50才未満から行われている）また、退職金はポイント制を採用して、一定額を上まわらないようにしている。（勤続年数比例制は採られていない）60歳以上の嘱託は給料の減額、年金受給者には年金相当の減額など、相当厳しい人件費の削減が実施されている。

委託手数料が増加しているが、その内訳、内容はどんなものか？削減する手段はあるのであろうか？消耗品費の削減も課題であろう。

光熱水費、修繕費、施設関係支出、設備関係支出は今後も増大する可能性が高く、少々の経費節減ではまかなえないのではないだろうか？危惧される場所である。

高額な共通機器、大型機器の予算として、第2号基本金組入が行われているが、今後、新規機器の購入、機器の更新、保守修繕など費用のかかることが増えてくるだろう。これらの準備には優先順位をつけた計画作りが必要になる。

いずれにしても、支出は増加することはあっても削減することは難しい。従って、いかに収入を増やしていくかが健全財政のカギとなる。志願者の増加対策、定員の確保、外部資金の獲得、私学助成の対象になっていない専任教員の有資格化による助成金の増加などに注力されたい。

志願者増加に向けて作成された「教員プロフィール」、「受験生への熱いメッセージ」の活用、高校訪問授業・実習などを今後も活用して欲しい。

### 3. 研究組織及び研究活動

#### (1) 研究組織

両学科が開学時に目指した方向と現状の中で微妙なずれが生じてきている。研究者希望、大学院希望は応用生命科学科に多く、一方、食品科学科では就職希望者が多い。この状況は今後も続くと考えられる。この状況から、学科別の入試を行うとする意見も生まれているが、本質的な方向ではないと思われる。この現状に対応する一つの方法として、研究室の教員が学生の研究室配属後に将来研究者希望の学生と就職希望の学生に、それぞれに必要な専門選択科目の受講を勧めたり、大学院進学を勧めるなど、一元的な教育でなく、細かい指導を行って欲しい。

将来計画委員会で、研究室の再編について検討されている。開学時からの変化（各研究室の研究フィールド、研究室間の重複研究フィールド、教授・准教授の交代による研究テーマの変化、選択専門科目の内容の重複、教員の欠員など）もあり、研究室の再編

も考えられる時期に来ていると思われる。しかしながら、赤字体質の解消のためにスリム化を図るのが目的ではない。より良く効率的な研究環境を目指して再編を行うべきである。その結果でスリム化につながることは否としない。

再編に当たっては、現在の講座制（1：1：1）の変更も検討されるべきであろう。現実に一部の研究室では講座制になっていない。

研究活動は、発表論文は昨年並みであったが、学会発表は170回に達し、10%増加した。発表論文は、数も大事であるが、学外の研究者によりどれだけ引用されているか、独創性、フィールドのトップを走る研究かが今後求められてくるであろう。

今後、大学院に進む優秀な学生が増加することにより、研究活動がさらに活発になることが期待されるので、研究者を目指す学生の養成、指導に力を入れて欲しい。と、同時にポストク問題についても早期に取り組んで欲しい。

## （2）知的財産権

一方、特許であるが、平成19年度に11件出願された特許は、平成20年度にゼロとなった。

教員の中に、出願費用など財政面での裏付けを希望する意見もみられる。出願料、審査料、特許権維持費用など多額な出費に研究室単独では対応できないことも理解できる。費用負担は大学負担が基本となろう。前回の評価コメントでも指摘したが、出願に当たっては、その特許が将来特許料収入をもたらす、権利費用を上回ることが必要条件であり、出願の是非を厳密に判断できる組織、機関が必要である。日本の大学特許は年々増加傾向であり、2005年には6億3000万円に達して年々増加している。米国ではカリフォルニア大学で200億円、ニューヨーク大学で150億円とライセンス収入は巨大で大学の財源となっている。

大学に権利を帰属する場合、発明者に対して発明報酬・対価を予め決めておく必要がある。日亜化学の例にもあるように、発明者への対価問題は厳密に定めておく必要がある。前年にも指摘したが、企業との共同研究で生まれた特許や事業化については、権利関係など事前に明確な契約を決めておく必要があるので、注意されたい。スタートした知財管理体制の構築に期待したい。

## 4. 社会貢献

科研費、受託研究費、奨学研究費はいずれも前年に比べて増加した。特に受託研究費は大幅に増加した。平成19年に設置された「産官学連携推進センター」の活動によるところが大きく寄与していることを評価したい。

地域振興に役立つ研究も貴大学に求められている要件の一つである。財政的に厳しい状況で、外部資金の獲得は、研究活動に不可欠であり、今後も大いに期待したい。

## 5. カリキュラム

初年次の基礎教育の充実に取り組み、確実に効果を上げていることは高く評価したい。一部の教員に多大な負荷をもたらしているが、現状では止むを得ないかも知れない。

教養科目の中で、第2外国語、人文科学は学生の社会性、人間性を高める上で重要であるが、どれだけの学生が履修しているのだろうか？薬学部では、教養科目の履修に

ついて考慮されている。2年次で学科選択、3年次から研究室配属が決まるので、理系の選択科目に流れる可能性が高い。特に、人文科学については、1年次に移動されることを望みたい。カリキュラム改正での検討課題とされたい。

2年次後期以降の選択専門科目については、学生の進路(科別、研究室、大学院希望、就職希望など)を把握し、進路に応じた履修指導を行うことも必要と思われる。例えばアドバイザーシステムの中で教員が学生への助言を行うことも一つの方法であろう。また、学生の進路選択指導として、「応用生命科学概論」の中で、卒業生や外部講師の講話やラボツアーが組み込まれているのは大変良い企画である。

これらの課題は、研究室の再編、カリキュラムの改正の中で活かされていくことを望みたい。

## 6. 教員の担当、負担

### (1) 教育

教員毎の担当時間の差については、昨年よりも改善されているが、未だ十分とはいえない。初年次の基礎教育を充実したため、英語、基礎化学の担当教員の授業時間が大幅に増加している。

また、専任教員の三分の一が私学経常費補助金の認定基準に充たない。この改善は財政上も重要である。中期計画のカリキュラム、研究組織の見直しの中で改善されることは大変重要である。

### (2) 委員会とその活動

学部、全学、センター、施設・管理、研究科毎に整理・統合が進んで来たことは評価できる。一方、平成19年には24委員会だったが、20年度には33委員会と増加した。このため、教員の負担が増大したことも無視できない。さらに統合、メンバーの削減に向けて検討されたい。

委員会メンバーが重複したり、内容的に類似したり関連する委員会、①図書委員会と図書館運営委員会、②IT委員会、HP委員会とサイバーキャンパス推進委員会、③放射線安全管理委員会と放射性同位元素利用施設運営委員会については統合の方向を検討されたい。

また、助教の参加、事務方の参加も教員の負担を減少させることになるので、可能な委員会にあっては検討されたい。

限られた職員、教員なので、組織は、出来るだけ小さくすべきである。課題によっては、教授会への議題提案、常設でない時限小委員会の設置などを活用する事も可能であろう。准教授、助教の活用も期待したい。

現在検討中である医専の4大化で3学部になる場合、委員会がさらに増大する可能性もあるので、問題点の早期把握と対応策の検討も中期計画委員会で検討されるべき事案である。

### (3) 研究管理体制

単年会計の弊害も一つの原因である「預け」、「差し替え」などは、教員が十分注意すべきことであるが、研究管理体制が整備され、経理処理、不正防止、通報義務などのガイドラインが明確になったことは評価できる。



#### (4) 若手教員について

若手教員（助教、助手）は研究活動の先兵であるが、教育、委員会、社会活動にも積極的に参加出来るようにしたい。学生にとっても年齢的に近い若手教員との接触時間を増やすことは有益であろう。高校訪問、出前講義などの学生確保など広報に役立つ活動も、若手教員が活躍できる場を増やして欲しい。各科の若手研究員が自由に意見交換できる交流機会もあって良いと思う。大学の将来は、若手研究員の育成と活躍にかかっている。

#### (5) 学生の就職

不況の中、高就職率を維持していることは、関係者の努力によるものとして評価したい。然し、不況下の影響か求人数の低下が見られる。また県内の企業の受け入れ限度も気になるところである。高就職率は学部の「売り」の一つなので今後も注力して行って欲しい。

また、大学院卒業生の就職も今後課題となろう、早期の取り組みを望みたい。

### 7. 学生に関して

#### (1) 学生による講義評価

この結果を、教員がどのように捉えて、改善に役立てるか、教員自身に係っている。やや苦言を呈すれば、授業に欠席する学生、居眠りをする学生などの授業評価も含まれていることも無視できない。また、予習・復習をしない学生も多い。

手取り足取りで面倒をみることや極端に学生に迎合することは学生の自立心、積極性の醸成に寄与するとは思えない。

#### (2) 学生指導に関して

近年多くの大学で学生の不祥事が頻発している。その中でも、薬物違反、飲酒運転は絶対に起こしてはいけないことであり、入学時からの徹底した指導が望まれる。全学で取り組むべき課題である。また、現在の若者の社会人としてのルール、マナーの欠如がよく言われている。本来、家庭での教育であろうが、大学においてもアドバイザー制度、研究室の教員による指導を進めて欲しい。

また、開学当初は、外部訪問者からも学生がきちんとした挨拶が出来ているといわれたが、最近では余り見受けられない。是非、続けて欲しいことである。

アドバイザー制度、部活活動、ボランティア活動、インターンシップ制度は学生の自立性、積極性、孤独防止、社会性に有効であるので、更なる取り組みを期待したい。また、学生意見箱「ひとことBOX」は良い企画であり、大学と学生のコミュニケーション作りに役立って欲しい。これまでどんな意見が出てきているのか興味があるところである。

### 8. 外部評価

「外部評価委員による評価表」は昨年に比べ、非常に判りやすく整理された。また、第1回外部点検評価をもとに将来計画委員会、自己点検・評価委員会で、学部の課題について、整理、検討が進んでいることは評価したい。

特に、将来計画委員会では中期計画の検討に着手している。これらの成果からみて外

部評価を毎年実施することが必要であろうか？今回コメント作成に当たっては、昨年と類似する指摘も多く、マンネリ化していることを反省している。上記2委員会の活動から見て、今後は3年に1回外部評価を行えば、目的を達成できるものと思われる。また、外部評価員も新らしく採用した方が、新しい視点を変えた指摘が得られるであろう。

教員の個人評価は、非常に困難である。外部評価員は全てのフィールドに熟知しているわけではないので、研究業績の評価は苦勞するし、的はずれになることもある。教育・研究評価は本人の自己評価や教員の相互評価にした方が正しい評価が得られるのではないのでしょうか？教育・研究業績の評価はその内容の中から、今後の自己啓発に役立つ指摘を取り上げれば良いのではないのでしょうか？

読売新聞社が実施した「大学の實力調査」を見ると、各大学で実施されている様々な施策なども判り、参考にすべき点が多い。

新潟薬科大学の総合自己評価は「C」評価となっているが、低すぎる評価であり、他大学に比べ決して劣っているとは思えない。数字が示されていない部活参加率、ボランティア参加率はどうか？分析してほしい。

今後、将来計画委員会の中期計画に教員の方々の提言、外部評価委員の意見が反映されてよりよい環境になれば、自信を持って「A」評価にする事が出来るであろう。

## 9. 終わりに

以上、意見、要望、提言を述べたが、中には、大学の状況把握が十分でない筆者の独善的なものもあるかも知れない。また、昨年に指摘した点と重複している提言もある。従って、上記に掲げた意見、要望、提言については大学自身で検討され、必要なものについては、自己点検・評価委員会、将来計画委員会で検討の上、優先順位を付けて、全学一致の上、中期計画に活かしていくことを期待したい。

## IV 委員会、センター、施設に対する評価

### 学部委員会

委員会名	予算委員会	委員名	◎平岡 昇、波田野 義比古
評価員による評価点（ 3 4 5 ）			
〔コメント〕			
<ol style="list-style-type: none"><li>1. 平成20年度では3千万円弱の黒字となったが、教員補充の未実施による効果もあろう。支出の55%を占める人件費の低減が努力目標であるが、22年度には定員割れの影響も解消し、定年教員など、利点も見られるので、組織の改正などを勘案の上、中期経営計画の作成を進めたい。増大している委託・手数料の削減は可能であろうか？検討されたい。</li><li>2. 中期計画には研究機器の更新、保守、購入予算を組み込んで欲しい。</li><li>3. 週当たりの時間数が5時間未満の教員については、カリキュラムの見直しで、補助金増加を検討されたい。</li><li>4. 研究組織、カリキュラム改正は、予算と連動されることを望みたい。</li><li>5. 予算作成に当たっては、収支決算を前年などと比較した比較収支決算表を作成すると役立つであろう</li><li>6. 予算の執行は大学（学部）の方針に基づいて為されるはずであるが、その様な方針はどこで決めるのでしょうか。</li><li>7. また、基本方針はどの様なものなのでしょうか。この辺りを明記する必要があるかと思えます。</li><li>8. 人件費を含めたお金の面を自主的に管理されていることに敬意を表したい。黒字の分を如何に有効に学部の充実に使用するかが重要なことと思われるが、機器について薬学部と協調して整備する体制があるのは、重要なことだと思われる。</li></ol>			

委員会名	将来計画委員会	委員名	◎平岡 昇
波田野 義比古(教務委員長)、太田 達夫(学生委員長)、浦上 弘(就職委員長)、武内 征司(入試委員長)、鱈坂 勝美(教授会選出委員)			
評価員による評価点 ( 5 4 5 )			
〔コメント〕			
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 委員会で纏めた中期将来計画は、今後実施すべき課題をしっかりと把握したもので、高く評価したい。今後は、優先順位をつけて、予算とも連動して確実に実施されたい。</li> <li>2. 学部の変化とはどのような内容を含むものなのか不明確かと思えます。</li> <li>3. 将来計画には短期と中長期とがあるかと思えます。この委員会はどちらを(どちらも)担当しているのでしょうか。</li> <li>4. 将来計画について、全教員懇談会を上手に開催して、重点目標を定めて取り組む姿勢は、適切なことだと思われる。入学者確保などの短期的且つ深刻な課題と中長期的な目標を旨く折り合いをつけて、計画が立案されることが重要だと思われる。</li> </ol>			

委員会名	自己点検・評価委員会	委員名	◎平岡 昇、武内 征司、浦上 弘、佐藤 眞治
評価員による評価点 ( 5 4 4 )			
〔コメント〕			
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 自己点検評価表は、充実して判りやすくなった。</li> <li>2. 当委員会の8月の総括や将来計画委員会の問題点のまとめから見て、毎年外部評価を実施する必要があるのでしょうか？研究組織、カリキュラムの再編が終了し軌道に乗る3年後位が次期評価で良いのではないだろうか？</li> <li>3. 外部評価委員、学生の指摘の中には、全体的を射るものばかりとはいえない。委員会、教員が、それぞれ該当するものを読みとり、自己研鑽、改善に活かして欲しい。</li> <li>4. 読売新聞社が実施している「大学の實力」調査の各大学の内容も参考になると思われる。</li> <li>5. 自己点検表は読ませて頂きましたが、第5の項目に相当する部分はもっと充実させてもいいのではありませんか。この項目は、生き生きとした意見が書かれています。これを基にして学部運営の参考にしたら如何なものでしょうか。</li> <li>6. 外部評価者による評価には、書面からの判断に基づいていますので、実情を反映したものでない場合もあります。どの様に取り扱うのでしょうか。むしろ新潟薬科大学に対する提言を歓迎した方がいいのではないかと思います。</li> <li>7. 自己点検評価に基づいて学部評価を定期的実施する体制を整備されたことには敬意を表したい。外部評価で指摘されたものを旨く主体的に選択して、改善に生かしていくことが重要である。</li> </ol>			

委員会名	FD委員会	委員名	◎武内 征司、浦上 弘、佐藤 眞治、 梨本 正之、高橋 歩
<p>評価員による評価点（ 3 4 4 ）</p> <p>〔コメント〕</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 昨年にも指摘したが、教務委員会や大学院関係委員会などに包含することは出来ないのでしょうか？</li> <li>2. 学力格差の解消のため、初年次教育を強化されたことは評価するが、教務委員会の活動と重複していないか？</li> <li>3. 特に3年次までに学生の自己PR力、プレゼン力を高めるには、講義の中でプレゼン、発言させる機会を増やすこと、学生の全員の入部制度、ボランティア活動の実施など検討されてもいかがでしょうか？</li> <li>4. 新潟薬科大学の将来の発展を見据えなければならない重要な委員会であると思いますので、将来計画をも視野に入れた活動が必要かと思います。その点が希薄な感じを持ちました。</li> <li>5. 外部評価とならんで学生の授業評価もFDには大きな役割を果たすではありませんか。</li> <li>6. FDは教員個人の教育力向上を通じて、組織としての教育力を向上するいろいろなレベル、形態の活動であり、特にFD集会を行うことにこだわる必要は無いと思われる。本委員会が学生の現実を踏まえた諸問題について、教員間での議論に基づいて対処しようとしていることは、その意味では適切な取り組みであると評価できる。今後、構成員各層の教育力向上のための活動が充実されることが期待される。</li> </ol>			

委員会名	教務委員会	委員名	◎波田野 義比古、梨本 正之、新井 祥生、 川田 邦明、高橋 歩
<p>評価員による評価点（ 5 4 4 ）</p>			
<p>[コメント]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学力格差解消に向け、初年次教育を強化したことは評価したい。今後は社会性修得に必要な人文科学を学生に積極的に受講させるため、1年次に移行させること、3年後期に所属研究室教員が必要とされる専門選択教科を受講させるよう指導させることを望みたい。</li> <li>2. 教員組織、カリキュラムの再編がより良き研究・教育につながることを期待したい。その際には、教員負担の平準化、教員の週時間未達を是正すること（予算上必要）、助教の活用などに留意して欲しい。</li> <li>3. 本委員会の活動は他の多くの委員会と関係することが多いので、十分な連携、協力を期待したい。</li> <li>4. 1年次の「応用生命科学概論」で卒業生、外部講師の授業、ラボツアーを取り上げたことは学生の進路決定に寄与するもので大変良いことである。</li> <li>5. 教員組織の再編は大切かと思いますが、それには問題提起にありますように、どのような教育を重視するかというカリキュラムの編成と一体にしないといけないと思います。</li> <li>6. 初年次教育のプログラムはどのような内容を含んでいるのでしょうか。高校での未修得科目や取得済みの科目でも不十分な科目に対する支援もあるのでしょうか。</li> <li>7. 教育の様々な課題に教務委員会として対応されていることに敬意を表したい。早期卒業、初年次教育、転学部それぞれ重要な問題であるが、それぞれについての制度を整備して取り組まれていることは、本委員会が十分機能していると思われる。教員組織再編、カリキュラム改正などの根本に関わる問題は、将来計画委員会と十分な連携の下で検討されるべき事のように思われる。</li> </ol>			

委員会名	学生委員会	委員名	◎太田 達夫、川田 邦明、重松 亨、 三宅 紀子、高久 洋暁
<p>評価員による評価点（ 3 4 5 ）</p> <p>〔コメント〕</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 心の健康、孤独化の解決にはアドバイザーシステムが更に機能していくことを望みたい。</li> <li>2. 近年大学に多発している薬物汚染、飲酒運転、交通事故などは、教職員、学生が一体となって取り組んで欲しい。</li> <li>3. 開学当初は、学生の挨拶が外部から評判になっていたが、近年、影を潜めている。しっかりと挨拶できる学生の指導を望みたい。</li> <li>4. 学生に対する種々の支援活動が行われているのはいいのですが、スケジュール主義になる可能性があります。ハラスメント対策やカウンセリングの充実是指摘されているように大事かと思えます。</li> <li>5. 博士課程の大学院が設置されると、学内の人員構成がより多様化するはずですが、ハラスメントはセクシャルハラスメントばかりでなく、他のハラスメント対策も重要になってくるはずで</li> <li>6. 学生委員会として充実した活動ぶりがうかがえます。学生の心の問題への対応は、どこの大学でも苦慮している問題であり、カウンセリング体制の整備も重要であるが、初年次教育・キャリア教育など教務委員会と連携した取り組みも必要のように思える。</li> </ol>			

委員会名	入試委員会 (広報関係を含む)	委員名	◎武内 征司、鯉坂 勝美、市川 進一、 米田 照代、佐藤 眞治、中村 豊
<p>評価員による評価点（ 3 5 4 ）</p> <p>〔コメント〕</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 定員確保のため、様々な努力をしていることは評価したい。</li> <li>2. 県内に受験生が集中化する中で、「高就職率と大学院進学力」を訴求することが受験生確保に役立つと思われるので、不況下に於ける高就職率の維持は重要である。広報関係、就職委員会との連携、協力を進めて欲しい。</li> <li>3. 7種類の入試を行ったことのご苦労良く理解できます。結果が良くて何よりでした。その成功の一因は広報活動を活発に行ったことによるものである。</li> <li>4. 新潟薬科大学に入学することの意義を受験生に広めることと、在学生や卒業生も「広告」の役割を果たすので、学生のための教育や就職斡旋などの活動を強化することが大事だと思います。</li> <li>5. 入試委員会ばかりでなく他の委員会(就職委員会など)とも連携する必要があるかと思えます。</li> <li>6. 必要な活動が行われていると評価できる。課題として、県内学生比率の高さをどのように考えるかは、入試への対応戦略の基本として重要なように思えるので、ある程度、統一した考え方を確認しておく必要があるように思える。</li> <li>7. 入試広報として充実した「熱いメッセージ」を作成されていることは、敬意を表する。</li> </ol>			

委員会名	就職委員会	委員名	◎浦上 弘、及川 紀久雄、鯉坂 勝美、 高久 洋暁、川田 邦明、佐藤 眞治
<p>評価員による評価点（ 4 5 4 ）</p> <p>〔コメント〕</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 不況化の中、高い就職率を達成したことは高く評価したい。この成果は学生募集に寄与するので今後も努力されたい。</li> <li>2. 対人能力が劣ったり、孤独な学生には、アドバイザー担当教員や所属研究室の教員と協力して、早い段階から部活への参加や行事への積極的な参加を勧めることも効果があると思われる。</li> <li>3. 学生が、研究者志望か就職志望かを、早めに見極め、対応していく教育、指導体制を作り上げていくことも役立つであろう。</li> <li>4. 学生の就職率の良さは定評があります。これは教育を始めとする学生に対するトータルケアが充分に行われていることと、応用生命科学科が学生のためばかりでなくサイエンスもきちんと行っていることが社会に理解されるようになったからではないのでしょうか。</li> <li>5. 大学院が一種の「避難所」になっているとの指摘ですが、これは極めて重要な問題を含んでいると思います。対処法を考えるべきでしょう。</li> <li>6. 大学院生の就職はどうなっているのかを知りたく思います。</li> <li>7. 精力的な努力が払われていることに敬意を表したい。就職先企業と大学との間の信頼関係の醸成と、学生に対する指導・支援が重要であることはいままでもないが、指摘されている課題解決のためにも、教務委員会などとの連携の下で、初年次からの広義でのキャリア意識形成教育（単なる就職指導ではない）の必要性について検討の余地があるように思われる。</li> </ol>			



委員会名	図書委員会	委員名	◎三宅 紀子、中村 豊、重松 亨
<p>評価員による評価点（ 3 4 4 ）</p> <p>〔コメント〕</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 薬学部との連携が進んでいることは結構なことである。</li> <li>2. 委員会のコメントにあるように、図書館運営委員会に統合し、学部毎の課題には分科会で検討することが望ましい。両委員会の委員も共通しているので、活動には支障をきたさないとと思われる。</li> <li>3. 全国的に大学図書館は多くの問題を抱えています。図書費の高騰と冊子体を購入することへの評価に関することが主たるものであるようです。この点をきちんとおさえて、図書館に対する方針を立てることが重要だと思います。非常に困難作業ですが。</li> <li>4. 現在の情勢下での図書館のあり方、維持の仕方はかなり重要且つ困難な課題であると言える。研究に必要な学術雑誌の購読を維持するためにはかなりの額が必要である一方、その利用は、学問分野の分化に伴って限られたものになっている。電子ジャーナル化は必要なことであるが、それにしてもかなり高額な投資が必要になる。反面、「学習図書館」としての整備についても、図書の選択、購入には種々の困難がある。研究図書館か教育図書館かという選択など、図書館そのものあり方を含め、この委員会の機能ということではなく、見直しが必要なのではないか。</li> </ol>			

委員会名	国際交流委員会	委員名	◎及川 紀久雄、川田 邦明、梨本 正之
<p>評価員による評価点（ 2 3 2 ）</p> <p>〔コメント〕</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. この委員会は何を所轄事項としているかが分かりません。</li> <li>2. 教員の海外出張の援助とその成果の論文化のみを行う委員会なのでしょうか。</li> <li>3. 海外施設と新潟薬科大学との共同研究、研究者交換、留学生の受入などは取り扱わないのでしょうか。</li> <li>4. 学部としての国際交流の意義付けを含め、この委員会の機能は良く理解できない。</li> </ol>			

委員会名	共通機器・施設 委員会	委員名	◎石黒 正路、鱒坂 勝美、川田 邦明、 佐藤 眞治、高久 洋暁
<p>評価員による評価点（ 3 4 3 ）</p> <p>〔コメント〕</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 厳しい財政の中、大型機器について薬学部との共同使用は推進すべきであろう。問題は保守、修理費用の負担割合である。現在の負担取り決めは不明だが、相互が納得する費用負担の決め方を検討されたい。また、更新、新規購入についても明確な基準作りが求められる。</li> <li>2. 共通機器の更新、高額機器の新規購入については、優先順位をつけて両学部の中期経営計画の中に計上されたい。</li> <li>3. 早急に提起されている問題点に取り組むことが大切だと思います。</li> <li>4. 具体的な点で、種々の困難があることは理解できるが、必要機器を共通に整備していく方向性に沿った活動の活性化、実質化が期待される。</li> </ol>			

委員会名	倫理審査委員会	委員名	◎浦上 弘(応用生命科学部)
<p>(応用生命科学部)三宅 紀子、梨本 正之、市川 進一、平山 匡男、(薬学部)渡邊 賢一 豊島宗厚(新津医療センター長)、小林一三(普談寺住職)</p> <p>評価員による評価点（ 3 4 4 ）</p> <p>〔コメント〕</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 審査請求の適、不適の判断を貴学教員が判断するのは、申請者に遠慮があり難しいことである。大学全体の倫理意識を高めるため、外部専門家を招いた研修を実施する事が必要である。正しく公平な審査を行うには、当面の間、委員会のメンバー全員を外部の有識者に任せることも必要ではないだろうか？特に、学生や幼児を被験者とする場合の審査は外部有識者以外の審査は困難であろう。</li> <li>2. 頂いた書類からは確実なこと分かりかねますが、どうやら「規程」がきちんと作成されていないような気がします。これを定めることがまずすることなのではないでしょうか。</li> <li>3. 制度整備が前向きに進んでいることは評価できる。</li> </ol>			

委員会名	病原体等安全管理委員会	委員名	◎太田 達夫(応用生命科学部)
(応用生命科学部)浦上 弘、小長谷 幸史、(薬学部)福原 正博、山口 利男			
評価員による評価点 ( 2 4 4 )			
〔コメント〕			
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 病原体や有害微生物の封じ込めはどのような施設で管理されているのであろうか？これまで、どうされていたのかも気になるところである。</li> <li>2. 病原体のみならず、毒物などの安全管理も含めた全学の管理運営体制の整備が急がれる。</li> <li>3. バイオセキュリティに関しきちんと処置はされていると思います。</li> <li>4. 自己評価にあるように、現状が満足行く状況にあるとは言えないようであるが、委員会としては前向きな努力が行われていることが伺える。活動目標に沿って活動が行われることが期待される。</li> </ol>			

委員会名	防災委員会	委員名	◎川田 邦明、新井 祥生、市川 進一、 浦上 弘、中村 豊
評価員による評価点 ( 3 4 4 )			
〔コメント〕			
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 防災、環境保全について全学的な取り組みに進みつつあるようである。学部委員会ではなく、全学委員会として取り組んで欲しい。</li> <li>2. あって欲しくないことだが、地震、火災などの場合、緊急連絡体制、教職員による消火チームや救護チームなどは整備されているのでしょうか？また、地域との連携はなされているのでしょうか？防災委員会以外に該当する委員会が見受けられないので心配である。</li> <li>3. 廃液処理が主たる目的の委員会のように思われますが、防災はかなり幅が広い分野をカバーするものなのではないでしょうか。</li> <li>4. 委員会の実務としては相応な実務的な活動が行われていると思われるが、危機管理体制、取り扱いに関する周知活動、教育訓練など課題はあるように思われる。いずれにせよ、全学的な取り組みが必要なことであると思われる。</li> </ol>			

## 全学委員会

委員会名	HP 委員会	委員名	◎中村 辰之介(薬学部)
(応用生命科学部)中村 豊、(事務部)斎藤 聡  評価員による評価点 ( 4 5 5 )  [コメント] 1. HP の更新でコンテンツが充実してきたことは認められる。研究室の紹介は、それぞれが工夫を凝らしていることが読みとれる。受験生への広告塔でもあるので、入試・広報委員会と、リニューアルの際には事前に協議されることを望みたい。 2. ホームページの構築御苦勞様です。大学に関する最新で正確な情報がそこから得られないといけないので、メンテナンスが大変かと思います。 3. 学生や教職員に関する情報はどうしているのでしょうか。例えば、講義変更などのアナウンスも含めて。 4. 十分な活動が行われていると思います。PC サイトと携帯サイトとの連携、英語版の作成が課題として挙げられていることは適切な課題把握であると思う。			

委員会名	I T 委員会	委員名	◎米田 照代 (応用生命科学部)
(応用生命科学部)浦上 弘、高橋 歩、(薬学部)浅田 真一、福本 恭子、神田 循吉、 (事務部)生野 昭雄、(図書館)図書館長 武内 征司、白鳥 寛、(法人本部)杉崎 亮  評価員による評価点 ( — 5 4 )  [コメント] 1. 種々活動が進んでいるので、特にコメント無し。 2. 委員会メンバーが多すぎるようである。 3. 問題点に指摘されているように、技術面での支援は大学の管理部門における専門家が対処しないと委員会では処理しきれないと思います。 4. 委員会と管理部門との連携を図る必要があります。 5. 適切な活動が行われているものと評価できる。問題点でも提起されているように、通常の施設管理業務として行われる事項と IT 委員会として行うべき事項の切り分けは(どこの大学でも問題となっているが)必要だと思われる。教員が関与している委員会としては、情報セキュリティーあるいは情報倫理教育などへの活動も必要なのかもしれない。			

委員会名	安全衛生委員会	委員名	◎宇田 裕(薬学部)
(薬学部)尾崎 昌宣、渡邊 賢一、(応用生命科学部)梨本 正之、(保健室)矢部 典子			
評価員による評価点 ( ー 3 1 )			
[コメント]			
1. 新型インフルエンザ対策はどうされているのでしょうか？			
2. 年度内に特に活動がなかったのでコメントはない。			
3. インフルエンザ対策などはこの委員会の仕事ではないのでしょうか。			
4. この委員会の趣旨が起こった問題への対応ということであれば、これで良いのかもしれないが。			

委員会名	サイバーキャンパス推進 委員会	委員名	◎杉原 多公通(薬学部)
(薬学部)上野 和行、高中 紘一郎、神田 循吉、(応用生命科学部)浦上 弘、新井 祥生、米田 照代、 (事務部)茂木 弘邦、生野 昭雄、(図書館)白鳥 寛			
評価員による評価点 ( 3 4 3 )			
[コメント]			
1. 「サイバーキャンパス整備事業」で設立された委員会であるが、終了後は IT 委員会と統合すべきであろう。委員会委員も重複しているし、内容的にも問題ないと思うが。			
2. 整備が進んだら、メンバーの削減を進めたい。			
3. 「整備事業」終了後の対策は、そろそろ考えておかないといけないではありませんか。			
4. サイバーキャンパス事業には広範な内容のものが含まれているように見えるが、何より、e-ラーニングをはじめとして、ソフトを整備する事業はいろいろな意味で困難が伴う事業となる。実現可能な年次計画の下で着実に推進を図る必要があるのでは？			

委員会名	ハラスメント防止委員会	委員名	◎長友 孝文
<p>委員長及び委員氏名</p> <p>◎長友 孝文(学生部長)、北川 幸己、平岡 昇(学部長)、鈴木 正利(事務部長代理)、太田 達夫、飯村 菜穂子、長越 暁子(ハラスメント相談員)、矢部 典子(保健室職員)</p> <p>評価員による評価点 ( 4 4 4 )</p> <p>[コメント]</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 本委員会が設立して各種規程が整備されたことは評価したい。</li> <li>2. これまでに、ハラスメントが生じたことはあるのでしょうか？</li> <li>3. ハラスメント対策特にパワハラ、アカハラに関する対策が今後重要になるかと思えます。</li> <li>4. 訴えがあった場合の対処には公正さも含めきちんと対応するためのプロトコールが必要かと思えます。</li> <li>5. 現段階は体制整備という段階のように受け取れるが、その観点では着実に規則や学生教職員への周知活動、相談業務などの体制整備が進められていることが見て取れる。活動目標にもあるように、それが具体的取り組みに繋げられることが期待される。</li> </ol>			

## センター（全学）

委員会名	産官学連携推進センター 運営委員会	委員名	◎小西 徹也(応用生命科学部)
(応用生命科学部)浦上 弘、平山 匡男、川田 邦明、(薬学部)中村 辰之介、渡邊 賢一			
評価員による評価点（ 5 5 4 ）			
〔コメント〕			
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 地域交流委員会が本委員会に統合され、着々と成果が出ていることを高く評価したい。共同研究に当たっては、契約、覚え書きなどの整備、成果（特許、事業化など）の帰属など明確にしておくこと。</li> <li>2. 学生志願者が県内に集中していく中、地域貢献プロジェクトは広報の中で受験生、高校、父兄に発信していくことも考えていくべきであろう。</li> <li>3. 外部資金を獲得する活動は十分に行われているかと思いますが、大切なのはその後のどの様な成果が出ているかを検証することではないかと思います。次の「獲得」のためにも。</li> <li>4. 研究成果の特許化などに対してはどの様な支援策をお持ちなのでしょう。</li> <li>5. 相応な活動が行われていると評価できる。しかし、どの大学でも事情はある程度は共通すると思われるが、教員側は「産官学連携」ということ自身に不慣れ、且つよく分かっていないところがあるので、ある程度センター側でニーズ、シーズを把握して、積極的に結びつけていくような活動が行われることが望まれるのではないかと。（そのためにはセンターとしてある程度充実した体制、マンパワーが必要になると思われるが）</li> </ol>			

## 施設・管理（全学）

委員会名	図書館運営委員会	委員名	◎武内征司(応)（図書館長）
(薬学部)大野 智、皆川 信子、星名 賢之助、(応用生命科学部)三宅 紀子、中村 豊、重松 亨、 (図書館)白鳥 寛、滝沢 紀子、五十嵐 芳美			
評価員による評価点（ 4 5 4 ）			
[コメント]			
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 計画に従って順次活動を進め成果が出ていることを評価する。</li> <li>2. 学部図書委員会は図書運営委員会に統合し、学部に特定する課題については分科会で検討することを勧めたい。</li> <li>3. おそらく一番問題を抱えている委員かなのではないかと推察します。経済面もそうですが、図書館のあり方に関する統一見解をたてることが重要なのではないのでしょうか。</li> <li>4. 市民への開放は多くの市民が来たときに、主として管理面で新たな問題が発生する可能性があります。</li> <li>5. 電子ジャーナル化が進められていることは、現在の状況から適切なことであると思われる。電子ジャーナル化を前提と出来るとしたら、いわゆる研究用雑誌の冊子体の購入については、当然抜本的な見直しが必要になると考えられるが、それも計画されていることは評価できる。教育図書館としての充実方法はいろいろと困難があるものと思われるが、その点について問題点を把握して、取り組みを進めており、それらを含め、適切な活動が行われていると思われる。</li> </ol>			

委員会名	放射線安全管理委員会	委員名	◎安藤 昌幸(薬)（施設長）
(薬学部)宮本 昌彦、(応用生命科学部)梨本 正之、新井 祥生、(事務部)鈴木 正利、神田 優作			
評価員による評価点（ 3 4 4 ）			
[コメント]			
<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 放射線同位元素利用施設運営委員会を併合することを検討されたい。メンバーも殆ど変わらない。</li> <li>2. 大型機器にも当てはまることであるが、更新、保守管理費用は、全学で計画的に予算を組んで進めたい。</li> <li>3. 着実な活動が行われていると評価できる。</li> </ol>			



委員会名	放射性同位元素利用施設 運営委員会	委員名	◎安藤 昌幸(薬) (施設長)
(薬学部)宮本 昌彦、渡辺 賢一、浅田 真一、大貫 敏男、(応用生命科学部)梨本 正之、新井 祥生、高久 洋暁、西田 浩志、(事務部)鈴木 正利、神田 優作、			
評価員による評価点 ( 3 4 4 )			
〔コメント〕			
1. コメントについては放射線安全管理委員会で記載したので参照されたい。			
2. 着実な活動が行われていると評価できる。「緊急事態対応要領」の制定を計画されていることは重要なことであると思われる。			

委員会名	動物実験委員会	委員名	◎尾崎 昌宣(薬) (施設長)
(薬学部)渡邊 賢一、若林 広行、(応用生命科学部)佐藤 眞治、市川 進一、三宅 紀子			
評価員による評価点 ( 3 5 4 )			
〔コメント〕			
1. 共通施設の管理は利用者の良識、公共心、責任無しでは難しい。守れない使用者には厳しく注意すべきである。使用者以外の作業員で解決するのは反対である。職員、学生の責任感を高めることが大学全体にとって、プラスとなるであろう。			
2. 動物の維持管理には大学の管理部門の協力が必要になるかと思いますが、それに関しどの様な体制が取られているかが分かりません。			
3. 活動目標に挙げられているように、法令などに則った運用をきちんと行うことには現実的な不便さや困難が有ることは良く理解できる。その点についての改善策を検討されていることは重要である			

委員会名	組換えDNA実験安全委員会	委員名	◎高久 洋暁(応用生命科学部)
(応用生命科学部)市川 進一			
評価員による評価点 ( - 4 3 )			
〔コメント〕			
1. 相応な活動が行われていると思われる。組み換え DNA 実験についても、動物実験と同様な課題があるものと思われるが・・・			

## 研究科の委員会

委員会名	研究科入試委員会	委員名	◎石黒 正路、米田 照代、重松 亨
<p>評価員による評価点（ - 5 3 ）</p> <p>〔コメント〕</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 本大学からの入学者が増加することを期待したい。</li> <li>2. 入学試験実施のための実務的な委員会として着実な活動が行われていると思われる。活動目標に書かれている課題、とりわけ1と3は入試委員会の範疇なのか。委員会の体制がよく分からないので、何とも言えないが、ある意味では教務関係も含めた研究科全体の問題のようにも思える。</li> <li>3. 博士後期課程の入試が当面大事になるかと思いますが、その具体的な対応はどのようなものでしょうか。</li> </ol>			

委員会名	研究科教務委員会	委員名	◎梨本 正之、高久 洋暁、三宅 紀子
<p>評価員による評価点（ - 4 3 ）</p> <p>〔コメント〕</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 特にコメント無し。</li> <li>2. 大学院教育におけるカリキュラムの問題点としてどのようなものがあるのでしょうか。修了に際しての合格判定の基準など。</li> <li>3. 前期課程と後期課程では対処法が異なるかと思えます。</li> <li>4. 平成21年度の目標に掲げられていることは、どれももっともなことであるが、いずれも具体的な取り組みをどのようにするのが問題である。大学院教育について「プログラム化」が課題となっている中で、大学院教育における人材育成目標の明確化とそのためプログラム化にどのように取り組むのか、もう少し具体的な取り組みが欲しい気がする。</li> </ol>			

委員会名	博士後期課程設置委員会	委員名	◎浦上 弘、武内 征司、川田 邦明
<p>評価員による評価点（ 3 5 4 ）</p> <p>〔コメント〕</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 1年遅れたことで進学希望の学生に問題が生じたが、学生の希望を受け入れた対応が出来たことは喜ばしい。</li> <li>2. 本委員会は今後も継続するのか、大学院就職委員会となるのか不明であるが、ポスドク問題については早期からの対策を進める必要がある。</li> <li>3. 設置おめでとうございます。これからいろいろな問題が出てくると思います。</li> <li>4. 何を教務委員会に引き継ぐか、設置委員会として残っている仕事は何かなどをまとめておく必要があるのではないのでしょうか。</li> <li>5. 大学院、とりわけ後期課程の問題は、どの大学でも様々な問題を抱えている。その中で出発する後期課程について、適切な問題点の把握はされているように見える。「大学院のあり方についての全学部的なコンセンサスの形成」を課題とされていることには敬意を表する。</li> </ol>			

平成20年度の教育研究活動に関する外部評価結果

---

平成22年1月8日

編集 新潟薬科大学応用生命科学部自己点検・評価委員会

平岡 昇(委員長)、武内 征司、浦上 弘、佐藤 眞治